

587 Tc-99m標識recombinant tissue plasminogen activator (t-PA)の血栓集積性に関する研究—標識法と安定性について
伊藤 和夫、塚本 江利子、古館 正従(北海道大学核医学科)、桜間 照喜(北海道大学第二内科)、西部 俊哉(北海道大学第二外科)
新しい血栓溶解剤として注目されているt-PAに対して、Tc-99mによる標識を試み、標識率、標識後のt-PA活性の変化、標識後の安定性に関して検討した。

t-PAは住友製薬より提供を受けた0.01%Tween80を含むrecombinant t-PA(SM-9527, lot.No.6103, pH3)を使用した。標識はt-PA1.38mg(0.2ml)に塩化第一スズイオン0.010μMol(0.01ml)と、Tc-99m過テクネチウム酸0.1mlを加え、20分間室温放置して行った。濾紙およびゲルクロマトグラフィーの分析では遊離Tc-99mは2-3%以下、水酸化Tc-99mが8-10%で、2時間までは標識率の低下は見られなかった。標識後のt-PA生物学活性の低下もなく、極めて安定な標識結果が得られた。

今回標識に成功したTc-99m-t-PAは、新しい血栓局在診断薬としての可能性が期待できる。

588 ¹¹¹In血小板 Scintigraphyによる大動脈瘤内血栓動態の評価(第2報)-FPA, FDP-Eの関連について -
首藤 裕、本保秀三、古川欽一(東京医科大学外科第2講座)梅田淳一、鈴木孝成、網野三郎(同・放射線科)

我々は前回の本学会で¹¹¹In血小板 Scintigraphy(血小板シンチ)が大動脈瘤内血栓動態の評価に有用なことを報告したが、今回は同時¹¹¹In fibrinopeptide-A(FPA), FDP-Eを測定し比較した。血小板シンチは tropolone 法にて行いRI-Angioと比較、RI集積強度を(-)~(3+)の5段階に分類した。真性大動脈瘤では腹部が胸部に比してRI集積は強い傾向を示し、解離性大動脈瘤では発症早期にRI集積が強く、次第に減衰する傾向を示した。FPA, FDP-Eは、共に血小板シンチのRI集積強度に従い高値となる傾向を示し、(-)~(1+)の群と(2+)~(3+)の群との間では、FPA(P<0.05), FDP-E(P<0.001)共に有意差を認められた。

589 動脈硬化性頸動脈病変の性状と血小板集積—血小板シンチグラフィ法と高解像超音波断層法を用いた検討—(第二報)

森脇 博、橋川一雄、柏木 徹、小塚隆弘(大阪大学中央放射線部)木村和文(同バイオ研核医学)半田伸夫、寶學英隆、前田宏明、福永隆三、松本昌泰、鎌田武信(同第一内科)井坂吉成(国立大阪病院循環器科)

昨年の本学会で演者らは、虚血性脳血管障害患者の頸部頸動脈を対象に血小板シンチグラフィ法、超音波断層法、血管造影法を施行し、動脈硬化性病変の性状と当該部位における血小板集積の有無との関係について報告した。今回、血小板集積の程度を血小板集積率(%PAI:platelet accumulation index)を算出することにより半定量的に評価し、また病変の性状を潰瘍形成の有無、plaqueの大きさ、plaqueのエコー性状など詳細に検討し、両者の関係を明らかにしたのでここに報告する。

590 リンフォシンチグラフィによる乳癌の胸骨傍リンパ節転移の診断能について

道岸隆敏、中嶋憲一、油野民雄、利波紀久、久田欣一(金沢大学核医学)野口昌邦(金沢大学第二外科)

術前にリンフォシンチグラフィを施行し胸骨傍リンパ節転移について確認された乳癌初回手術例63症例の64の乳癌を対象とした。患側64例と健常側59例の合計123例のリンフォシンチグラフィについて評価した。^{99m}Tcレニウムコロイドもしくは^{99m}Tc HSAを肋弓下の腹直筋内に注射し撮像した。患側13例と健常側16例では、注射部位より上流の全てのリンパ節が描出されなかったので評価の対象から除外した。胸骨傍リンパ節転移陰性の患側42例と健常側43例でのリンパ節の描出率は上部95%中部62%下部79%であった。上部のリンパ節が描出されないことが胸骨傍リンパ節転移の所見であるとする、sensitivityは11%、specificityは78%、accuracyは66%であった。